

さよならを日本に

そろそろ別な生き方を

井上ひさし



ある大雪の冬の想い出

鶴見 私は井上さんのいろいろな作品を見ていて、最初に子供の時にあらわれてくる家庭の中の自立の必要というテーマ、これが非常にハッキリ、しつかり掴まれていて、それが全体を貫いているという感じがしましたね。つまり「親なんかダメだ」とバーンと言っただけで否定するとか、「出ていけ」とか「自分たちは出ていけ」というんじゃない、もう一つの視点が子供の時からあって、そういう風な自立の考え方、それが面白いんだなあ。

四、五年前の八月十五日記念集会上に突如として中年の船員が現われて、「学生たちのしていることには賛成だ。俺も戦争にいったし戦争は嫌いだ。だけど一つ言いたいことがある。年寄りは大切にしてくれよな」とそれだけ言うわけですよ。ああいう視点というのが井上さんの「あくる朝の蟬」やなんかに出てくるテーマでね、これは素晴らしいなあ。

人間なんていうのはお互いの照り返しでね、他人はすべて自分の鏡。「道元の冒険」で、気狂いみたいな中年の現代人が出て、道元がそれに対する鏡になっている。道元にとっては数世紀のちの日本の気狂いの中年男が自分の鏡になる、そういう時代を絶したピンポンのやりとりみたいのがあるでしょう。その輪廻の思想というのは、面白いんだなあ。そこまでのいかないと、自立に基く連帯というのにはなかなかうまくいかないんじゃないかな。自分はこのままでいいんだ、といって自分を絶対化するものは自立じゃないですよ。やがて消えていくもろさ、消えていく具合の悪そうな顔をしているひと一人一人に自分の顔を見るときというのが連帯のきっかけなので、

国家からの自立を求めて

明人間

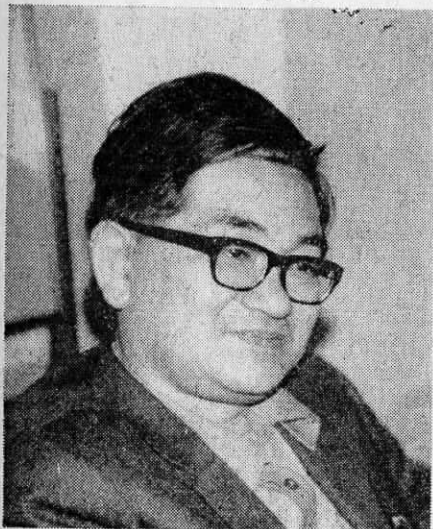
国というのをとつばらっちやあって、違う単位のくくり方ができるといいなああって気はしますね。キャバレー立国でもいいですね。世界中のキャバレー立国と姉妹国になったりして、チェーンですね。しかし、ひょっとして小説家の国なんてできたら……

対談

笑う透

たとえば税金を全然払わないで生きている人を知っています。戦争中でも、徴兵にかからないで逃げまわった人っているんです。それからアメリカの脱走兵をかくまった人たち。——そういう透明人間たちによって準国家、透明国家ができてくれば……

鶴見俊輔



そこを掴まなければ自立というのはありえないと思うんだ。だから私がこの本を読んでいると学園闘争と二重写しになって、秀れて現代的なテーマだと思ふし、あそこで本当に「大学解体」なんかを本気でやった連中はね、それから三、四年遅れても「道元の冒険」とか「あくる朝の蟬」を読んで自分自身のテーマを、その意図をとり直すというか、そういう気になるんじゃないかなあ。

井上 僕が一番小さい時を思い出して、人間ていうのはこうやって生きていくのかな、と思ったのは、雪国で育ったわけで、雪がたくさん降りますけれど、とりわけたくさん降る年があったんですね。それで、戦争中ですから、親爺さんとか兄さんとかですね、一番の働き手というのはみんな町にいないわけです。それで残っているのは子供と、女と、老人なんです。で、ポッカリと大事な支柱がない家が殆んどで、それで暮らしてたわけです。それが冬、あの妻い大雪になったわけですね。僕の家でもその隣の家でも雪があんまり積もりすぎてミシミシいいたしたわけなんです。その時みんな自然に年寄りを中心にして、働き手がいなくてどうしたらいいか、という相談が一瞬のうちになされて、とにかく小さい子供に屋根の上でもらおうということになって、僕ら体重が軽いんで屋根の上で雪おろしをすることがあったんです。その冬のこと非常に頭に残っているわけです。

要するに中心人物がいなくて、一番頼りになる人がいないけれども、力の弱い子供やお母さんたち、それに年寄りが一瞬の間に持ち場が決まって、子供が上って雪をおろす、老人の場合、「ひさしまでこないで中心からおろしていけ」とかいろいろと教えてくれ、それを僕らは聞きながら、自分の判断も加えて雪をおろしていく、その

間にお母さん方が、三軒ぐらいまとまって、おりてきたら暖いお汁

粉まではいかないけど、おモチでも食わせようといった、そういう一冬が過ぎたんですね。その時に、自分は子供で力は弱いけど、いろんな経験の人に教えてもらえば役に立てるとか、全員が寄ってたかって中心が抜けたところをうずめていたという印象がすごく残ってんですね。

そして中心がズーッと抜けたまま、僕の場合親爺が死んじゃったし、戦争に行った人たちもかなり死んじゃって、町というのは中心が抜けたまま戦争の終りをむかえて、そこへポカッと民主主義が入って来たんですね。それぞれの立場で、こうやった方がいい、いやこういう風にやった方がいいというふうなやり方というのか、そういう方法論があつて、そこになるべく大勢の人が納得出来た方がいいんだ、という民主主義といいますが、素朴な考え方というのがピジャッとはまったので、僕はアメリカ映画と野球と民主主義というのは、本当に素晴らしいものに見えたわけですね。それが今までズッと続いているような感じがするわけです。

結局、すべての人間は年とっていつて死ぬのをまぬがれないわけ、自分も年とったら若い奴に的確に自分の経験で、こうやった方がいいよ、と教えられるような老人に、できたらなりたい、というのがどっかにあるんですね。それがどうしてもギリギリの場で、何か書いているとヒョッと出て、われながら古いなあ、と思うんですね。

あの冬の、弱い者が全員で雪とたたかたという記憶から、その手で、いろんな世の中のマイナスというか、いやな世の中を直していけないだろうか、という人に笑われるような素朴な楽天主義をも

「道元の冒険」にも出てくるし、水木しげるの漫画にも出てくるね。その輪廻の思想は、「道元」やカトリックより前の、育たれた時の東北の伝承とかね、自分の身辺の小さな経験とかね、そういうこと

とから出てくるのかも知れないし、どうですか、そこは。井上 僕がそのことについて記憶があるとすれば、僕らの町に女の乞食がいたんですね。オシで、あの時四十すぎたと思えますけど、僕ら子供からみると相当年をくった、バカですね。掘立小屋みたいなところに住んで、いろいろなことがあつたらしいんですが、それは町の人はあまり言わないんですね。毎朝いろんな家をまわって御飯をもらって、それを食べて、僕らは石ぶつかけたり、「見せろ、見せろ」なんていうと、機嫌のいい時は着物をまくって見せたりするよな、そういう人がいたんですね。この人は三百六十五日のうち三百六十四日ぐらいはそういう位置にいるんですね。それで

お祭の時だけ、この人が主役になっちゃうんですね。今流に言えば道化ですね。お祭の日は彼女の本舞台になるわけです。彼女もこころえていて、お祭の宵宮になってくると、着物なんかもちやんと洗濯してね。で、客観的に見れば気持ち悪いんですけど、お白粉なんか塗って、唇からはみだした口紅なんか塗って、宵宮で踊りを踊るわけですよ。メチャクチャな踊りですけど、それでストリップというか裸になって全部見せながら踊って、みんな拍手したりおでんをやったりして、その時は花形なんですけど、お祭が終わるとまた乞食でいじめられる存在に戻っていくわけですね。それ見ていると結局バカがリコウになるわけですね、その日だけ。いわゆるリコウだと思っっている普通の人が、その日だけはバカのやることを喜

っているところがありますね。

祭りと女乞食の変貌

鶴見 世の中を直していけるかどうかわからないけども、しかしそのようにして助けあって滅びていくのが人間としては一番いいことであつて、それ以上のことは望めないんじゃないかっていう気がしますけどね。そのようにして滅びていけば、滅びていくことの中にある種の充実があるでしょう。

歴史は人間の登場から終末まで一直線に進んでいくわけでしょう。人間個人は生まれた時から死に向って進んでいくわけだ。しかし、意識の構造からいうと、これは常にこれまでであつたもの、これから来るものを反映してのわけで、一方的に流れていくという関係ではないわけですよ。意識から言えば、自分の終りを先取りできるわけ、自分はどうせ死んでいくものだ、と考えれば、死のところを居直って逆に見ることはできるわけでしょう。

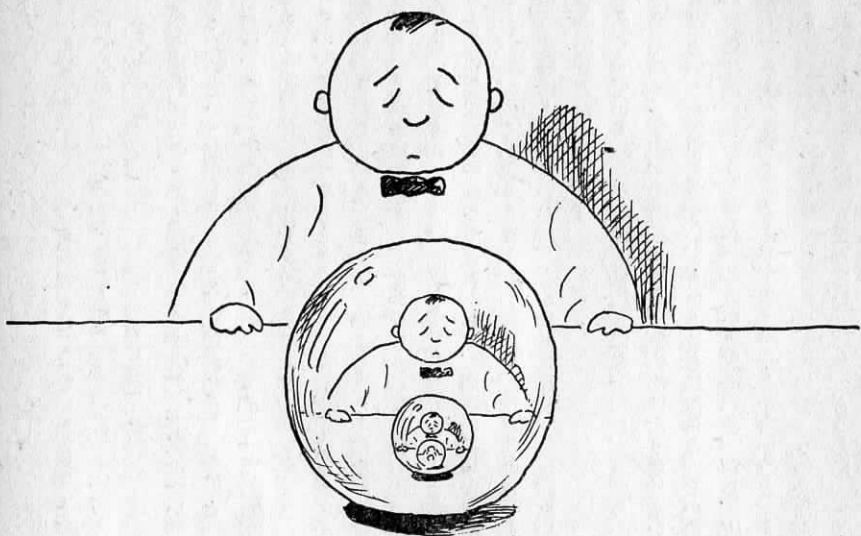
すると、全部意味が変ってくる。今までつまらないものばかりに見えていたものが、ある限界をそなえた、ある積極的なものに見えてくるとかいう風にして、物に対するやさしさを獲得するという、物すべての意味が変ってくるという、そういう視点の獲得になると思うんですけどね。そういう視点をもった時には、自分は死んでなくなっちゃっているわけだから、自分を存続させるということは他人の中に入ることではかなしえないわけでしょう。だから昔の道元であるとか、自分が死んだあとの誰かの中に入りこむという風にしてしか自分の観点というのは貫かれなくなつて、意識が広くなつていくわけですよ。そういう時になって、はじめて人間同士の連帯と

んでみているわけだから、なおバカになるわけですね。一日だけ価値が転倒しちゃうんですね。

このことで一体なにが大事かという、絶対的なものはそうたくさんないということですね。人が生まれるということ、年をとっていくと老人になるとか、あたり前ですけど、それとか、やがては死んでいくとか、お天気の良い日や病気の時は気分がよくないとか、実に根本的な、実にやさしい、だれでもが納得できる常識ですね、それはもう変ないんです。だけど、他の第二次的常識といいますが、あの人は偉いとか偉くないとか、力があるとかないとかは、ある日を境にしてバツと変っちゃうんで、世の中、二つ三つ重要なことを残して、みんな相対的になつてくるっていうんですね、そういうことを教えられたような感じがするんです。

鶴見 そういう、自分を絶対化しないというかな、それから人と人とお互に鏡になるような関係とか、そういうものを持ち込んできて自立という風な考え方が出てきてると思うんですね。

それは、国家を相手にしている場合もそうなんですね、国家のどてっ腹に風穴をあけるといふのは、それはそれでいいんだけど、風穴をあけたあと、更に強固な壁をつくるなんてことになったら、どうなるのかね。むしろ、ある程度無視しながら暮らしていく道も相当あるんじゃないか、そういう可能性を考えますね。そうすると、「自分の命をかけて」とかね、「二十四時間全部世界のひもじい人たちのことを考えて、それを代表して生きる」といった特別の人じゃなくて、普通人の中にある革命性っていうのかな、そういう風なものとの交流できる視点というものが出てくると思うんですね。普通人というのを、たとえば自分が革命家であるとしても、自分



たちが出てきた母胎として大切に、という考え方が残らなくちゃだめだと思っやうです。

高橋和巳が死ぬ前に「わが解体」という本を出しているでしょう。あの中で面白いと思ったのは、彼は京大の学生だった時分、というところ、ちょうど血のメーデーのところ、あのころ京大の細胞なんていうのは、閉ざされた特殊な集団だったんですよ。高橋和巳は学生として、それに近いところについて、何度か相談を求められるんですね。あの頃は「あいつはスパイだ」ということを言いだして、それを査問委員会にかけて、殺した場合もあるでしょうし、殺さなくても相当の拷問を加えたりなんかするわけですね。最終的処罰をしようわけね。そういうことについて、査問にあたる人間というのは、いやなわけですよ、もとの友達だし、悩むわけですね。それで相談を求められたんですよ。高橋和巳はそこで一つ提案しているんですよ、「一人だけ党なんかと何の関係もない第三者を大衆代表として入れよ」と。一人でいいから、それを査問の場に立ちあわせてくれと。それはいれられないわけけども、その事が終ってから20年ぐらいたって、もう一度内ゲバ時代が来た時に高橋氏がこれを書いて発表したわけですよ。内ゲバというのは閉ざされた集団があって、完全に閉ざしたところで自然に起る現象でしょう。これを完全に閉ざしてはいけない。蟻の通る道でも作っておくことは必要だ。決定的な査問とか告発という段階には、まったく関係のない第三者が普通の人間としてこれを見てどう思うか、ということを考えて、そういうことがなければいけないんですよ。普通人から自分を切り離したらいかんと思っやうです。

自立の運動というのはいろいろあるだろうけど、閉ざした自立の

運動というのは必ず激んで退廃する、自立そのものの足場も消えてしまっやう。

井上 人間には、ひっくり返っても変らない何か平凡な常識があると思っやうだけど、それを隠してる、それをあんまり考えてないものに對しては割と本能的な反発がありますね。

ですからNHKのアナウンサーがなぜいやか、という、非常にしかつめらしいといっやうすかね、非常にげすない方をすれば、放送の一分前に必ず、ちょっとアガリ気味で、オシッコなんかかき出したに違いないんですけど、そしてヒョッとしてズボンなんかオシッコのしぶきかなんかかかかってる筈なのに、そういうのとは一切関係がない、私はコウノトリが運んできてくれて生まれた、そういうイヤライなものとは全然関係のない人間でございませう、みたいな顔で、「過激派は……」なんて言われると、すごく腹が立つわけですね。それから「兇悪犯××は……」とか、悪いことをした人間は悪いんですけど、やっぱり何かひっくり返ったら自分もやりそうなことに対してそういうエラそうな態度をとれるか、と思うとNHKのアナウンサーとはどうにもなじめないわけですね。やっぱりヒョッとしたら、オレもそうなるかも知れないけど、とりあえずこういう罪を犯した人がいるんで、参考のためにお知らせします、みたいな感じだったら許せるんですけどね。だから一歩間違えたら自分もそうなるっちゃやうということを考えて、生きていかなければいけない、と僕なんか思っやうわけで、一種の貧乏性というか安全弁なんですよ。

鶴見 それが流転輪廻の思想なんですよ。

反共、反反共、反反反共……

井上 僕は思想の科学の「哲学・論理用語辞典」という一九五八年六月に完成した辞書を、十六年間ぐらいたくとも一週間に一ぺんは何か用事があって見ているんですけど、今たまたま「重要性不當強調の虚偽」という項がありましたね。これを見て思っやうです、資本主義より社会主義の方がいい、社会主義より共産主義がいい、この問題は自明のことだから、全然検討しなくていい、そう信じる、というように自分をしてきたやうな気がして、それを考えるのが怖いんですね。

ぼくも今は左ふうのことを言っているんですけど、左が世の中をとった時に、やっぱりそれにも反対するだろうと思っやうです。恐くてできないかも知れないんですけど、拷問なんていうとすぐマイタマイッタなんて言うかも知れないんですが、左が世の中をとった時に、自分は違う方にまわって行って、次のステップをいいたか悪いか言っやう、それがくるとまた次と、明治粉ミルクの罐をもった子の手に同じ絵があつてズーッと続いてくみたいな、恐いというか頼りのない気がすることがあるんですよ。今度のソルジェニツィンのことなんか見ていると、だんだんそれが本当みたいになつてきて、なんか心もとないですね。

そういう中で、世の中をよくしていくというか、一人の力で絶対そうはならないんですけど、それはどういふことなのかというの、まったくわからない状態ですね。どこまでいっても人間はバカじゃないか、という気がして、もしそうならオレはバカとしてバカバカしく人に迷惑をかけないでバカなりに幸せに生きていきたい

という気がするわけですね。

鶴見 人間はどこまでいったってバカではないか、というのはもう少し違った言い方をすれば、自分はバカじゃないかなあ、と疑うゆとりをいくらかとっておくということでしょう。

井上 そうですね。

鶴見 疑う権利ってことだと思わなくていい。私はそいつを手離したくないという気がしますねえ。ただ同時に、私にとって一番の問題は、空腹って問題なんですよね。空腹になったらとても困るわけですよ。政治は空腹を少なくすることに全力を尽くすべきだと思われ、どうも考えてみるとこの百年程はね、社会主義がそのために随分努力したし、共産主義運動というのもそのために随分努力したと思う。これには脱帽する、なかなかこれには歯むかうわけにいかんあ、と思わなくていい。

それじゃない側はなんやかやでごまかして、空腹な人間をそのままにしておいて、少くしようとはしないわけだ。それで私は反共産主義という立場はとりにくいので、どんな場合にも、反共共という立場に自分を置きたいのです。

自分をめぐっている社会が共産主義社会になったらどうするか、という問題が残りますが、その場合にも、反共にはなりたくない。ただ反共共というだけだとまずい、ということになると、そのためにつらい立場に追い込まれますね。そういう立場に立つたら、どういう風にしたら疑う権利を自分として確保できるかというところ、今私が考えているのはね、その段階では文筆業をやめちゃうことなんです。文筆業としてそこにとどまっていればね、どうしたってそれは次官とか大臣と似た立場に立つことであって、そうでなきゃ配給

ですよ。

キャバレー立国は如何?

編集部 井上さんの場合、現実性を考えないで夢想でいいんですか、何かそういう方法っていうのを思いつかれますか。

井上 現実性を考えないとね、くだらないことが考えられて好きなんです、とにかくお互いに絶対に喧嘩しないという約束をして、まず一億総立候補しまして、これは大変な手間がかかりますが、かなり共通する人が共通した場所で暮らしていきなりたいなことができればいいと思わなくていい。

僕はその場合、医学立国というのをやりたいわけですね。これは本当にマンガですから言ってるだけ無駄みたいところがありますけど、例えば東北の花巻あたりで温泉が出て景色がいいところを、岩手県の五分の一ぐらい大企業が買占めている土地をいっただいで、あの辺に小さな国を作りたいと思わなくていい。それに共鳴する人は全部集まれ、というんでみんな揃ってむこうに行ってください、医学の国をつくりたいわけですね。そこでは看護婦さんがきれいでね、それでしかも最新の医療と最大の看護をするような病院やサナトリウムなどを作って、とにかく世界中の人が、あそこの国にいてみてもらって、それで駄目ならオレもだめだ、というぐらいにしまして、そうすると、これは「吉里吉里人」にもやがて出てくるんですけど、「毛沢東とかニクソンとかブレジネフとかですね、ソルジェニツィンなんて人が同じ病室でもって寝てまして、リンゲルなんか射ってもらってましてね(笑)、それなら敵も攻めてこないでしょうし。なんか、そういうある一つのことに対してみんなオレはそっちの方に

くれないですからね。だから、むしろ疑う権利があるとすれば、自分の夢の中で行使するとかね、道を歩く時に歩き方というのかな、物の見方の中で工夫するとかね、それ以外に方法はなくなってくると思わなくていい。しかし、なんらかの形で疑う権利というのは確保したいし、さらに人間が千年も二千年も続くとしたら、それを手離してしまつたら人間はそこからつぶれていくと思わなくていい。だから、まず空腹の問題が来て、次に疑う権利が来て、という風に考えるんですよ。

ブルジョア文化というのは疑う権利の方は宣伝し擁護してくれるんだけど、空腹の方は聞かないわけですね。それは困るんですよ。ブルジョア社会の中に住んでいる間はですね、まず空腹が自分にとっての一番重要な問題だということから目をそらしたくないですね。だが今迄のマルクス主義の展開の方法からいってですね、それから出てくる社会形態が自由を保障するとは考えられないですね。大変むずかしいいろんな問題が残るだろうって気がしますね。

井上 たしかに先生がおっしゃったように、にもかかわらずやっぱり反共共なんです。それで追いつめられた時、言葉の上の遊びみたいなものですけど、反共共から反反反共共という風の一つ飛びに反をつけていく、そういうスタイルで生きていくより他はないと思わなくていい。

鶴見 そうかも知れないですね。

井上 社会がすこしでもよく変わっていく、先生のおっしゃった世の中が空腹という点では一つ二つと進歩していくのと、時の権力が風穴を一つでも多くあけていってくれる、ということが同時に成り立つようなことを、誰か考えてくれないかなあ、という気がするんですよ。やってみようかなという人が集まって一つの共同体をつくって、お互いに喧嘩なんかしないで、それぞれやってつらいいなあ、と思わなくていい。机上の空論というかマンガみたいなものですよ。

鶴見 お互いに喧嘩をしない取り決めといえ、ヤマギシ会の場合は農業立国ですね。そういう風に一つの社会のつくりとって必要ないくつかの職分だけを考えて、内ゲバをトゲ抜きするという条件で社会を作っていくというところは恐らく可能でしょうね。

井上 これまた冗談になっちゃうんですけどね、キャバレー立国でもいいですね。とにかく旨い酒をすすんで、まずくてもいいんですけど、楽しく飲ませる大飲業地帯みたいなのがあつてとか。とにかく、みんな同じようなことを考えている人が、話し合いである一区域で住んでいくみたいなね、それが世界中の同じようなキャバレー立国と姉妹国になつたりして、チェーンですね(笑)、ハリウッド・チェインみたいですよ(笑)。国というのはとっ払っちゃって、違う単位のくくり方ができるといいなあって気はしますね。現実には難しい、というより不可能ですけど、「吉里吉里人」の場合は逆に国でくくっちゃったわけですけど、国というくくり方になつてくると、いろんな体裁とか代表は誰にするとかですね、結局なんかもとに戻っていく気がするんですよ。

フィンガー5は外国人

鶴見 国というくくり方をどうして越えるのか、というのは大変難しい問題なんですけど、例えば沖繩というのにはね、虚心に考えてみると、自治領として独立する条件は十分に整っていた、と思わなくていい。あれは日本の国家から賠償を取るべきであつてね、一億玉

砕とか本土上陸作戦とかいうことが、あそこだけで行なわれてきたんだし、日本の軍隊があそこで闘って、玉砕命令も随分出したんだし、たくさんの方が殺されたわけでしょう。戦後もあそこだけ切り離されてアメリカに売り渡されちゃったでしょう。それに対して当然、大変な黒字国家になっている日本はお返しすべきだと思う。その犠牲によって繁栄してきたんだから。沖繩の人がもし好むなら日本に帰ってもいいし、日本が賠償を出して、自治領としていろいろな便宜をはからせてね、そして沖繩はいろんな国々と対等の貿易をして、日本は税金をとり立てない、という風にしたら、沖繩の人にとっても非常に得だったと思うし、少くとも十年ぐらい前は今ほど汚染されていないしね、美しい風景があるわけだから、自治領に来る観光客も随分いるだろうし、自分たちの風土を楽しんでね、自分たちの国というものをつくるのができたわけでしょう。で、中国ともアメリカ合州国とも日本とも対等の仕方でも交通してね。そうすると沖繩を通して日本も国際経験が豊かになって来たと思うんですよ。そういう風にすべき条件というのは勿論あるわけだけど、そんなことを日本の権力者は思いつきもしないし、それが普通だ、と思っている。私が今言った意見は全然突飛な意見じゃないと思うんですよ、日本が沖繩にやったことを考えれば、日本の未来を考えれば得なことだと思うんですよ。日本よりも遙かに貧しいメキシコがヤキに対して領土を保全しようなことをやればいいじゃないですか。

その次に、日本の中にいる在日朝鮮人六十一万人が同じような補償を受けて、教育の便宜、それから就職の便宜その他についてあつせんされるわけですね。そのようにして日本の中にとどまっていくな。少ししかないんですね。というのはトナカイ産業には物凄く広い土地があるからですよ。とにかく民族国家がヨーロッパではじまつてから数百年は彼らの存在を許していたんですね。そこに妙味があつたと思うんですよ。そういうことをやっていたらいけないんじゃないかなあ。世界的規模でそういうことをやっていって国連などがそれを調整する機関になってね、国家単位じゃなければ話を受けつけない、なんてことはやめてね、準国家からも半国家からも話を受けつけていくという風にしたいとね。

井上 半国家というのは面白いですね。だんだんそうなると日本というものがなくなったりして、それはそれで面白いですね。

鶴見 ささまざまな半国家、準国家によって支えられたお互いが協力するような一つの経済協同体としてやっていけばいいのですね、それが世界に対していろんな影響を及ぼしていくということが世界の新秩序ということだと思うんですがね。

本当に沖繩はその意味でチャンスを持っていたんですよ。どうしてそうならないのかなあ。自由都市か自由自治領であるべきでしょう。独自の文化を持っているもの。

井上 するとフィンガー5なんていうのは外国人歌手ですね(笑)。大きく大きくというくり方をやめちゃって、もっと小さく小さくっていく感じなんです。

迫害されている集団は強い

鶴見 小さくくくるのは必要だと思っただけです。ただ小さくくくる時にギューッとくくっちゃってね鬱血状態にしないで、ある通り道を残してという風にしないと、やっぱり自滅しちゃうんだな。そ

ある種の特権を持って。それも、これだけ日本がひどいことをしたことを考えれば当然だと思っただけです。日本はそれを補償するだけの財力はあるわけだ。で、なぜ補償したかということも小学校の教科書にでも書き込めば、それが未来の日本に対していい影響を与えるわけですよ。日本はそれだけの国だと思っただけから、恐らく正当なプライドを日本人は持つでしょう、将来。

そういう風な手を一手一手打っていくということ。更にアイヌについては、日本人がひどいことをして滅ぼしてしまったからむずかしいんだけれども、そういうことをゆっくりにやっていくことがね、日本人自身のためになると思っただけです。

そうすると日本の中に半国家というか準国家とでもいうものが出てくる。大体日本の国家が本当に軍隊を持たないならばですよ、実は持っているんだけど、これを減らしていつて牙を抜いていけば日本自体が半国家になるわけでしょう。半国家の中にいくつかの半国家、準国家を抱え込めばね、やっぱり世界の未来に対して面白い位置に立ちうると思っただけです。

井上 そうですねえ。

鶴見 そういう風にしていかなければ世界の未来は再検討することはできないと思っただけです。世界ではいろんなところでそういうことはあつたわけだ、例えばラップランド人なんていうのはスウェーデンとノルウェーとフィンランドと三つの国境にまたがってトナカイを飼って暮らしていたわけですよ。国境なんて自由に入り込んでいたんですよ、一つの文化を保つてね。ところが近ごろ彼らの住んでいる下で鉄が出はじめたんでね、それを掘りくずしはじめちゃって、棲息が非常に困難になっていくわけですよ。未来はほん

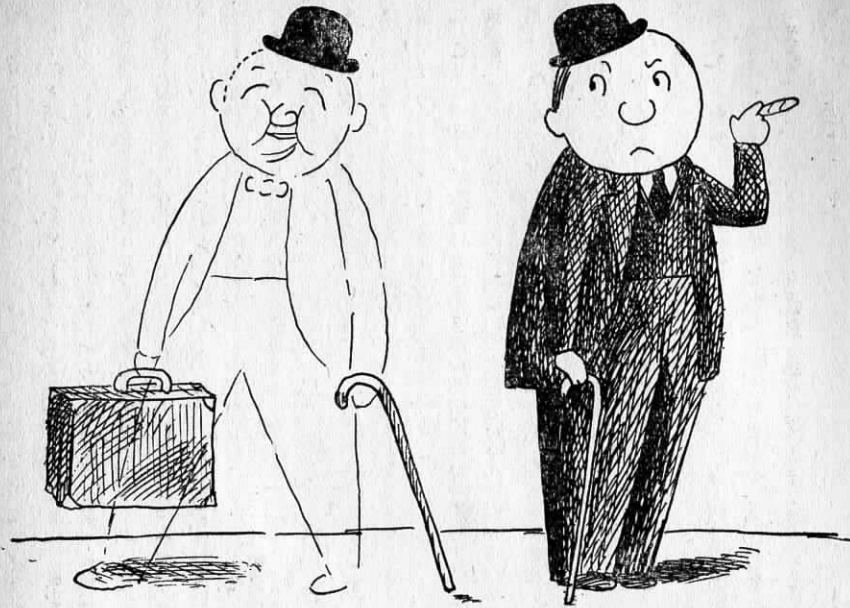
こは恐ろしいと思っただけです。人間の思想というのは大変弱いものでね、思想で一つにくくったらあぶないと思っただけです。抽象的な理論とか綱領でくくったたりしたらいけないのでね。人間はうしろからつかまれることが多いんですよ。思想というのは前に向いててね、自分が見えるからだの前半部しか見えないけれど、人間大きな変り方をする時は、うしろから掴まれたということが多いわけですよ。神の手か自分の無意識かも知れないが。だから、自分のよくわからないところで試みをしていってね、それが思想の起動となる。思想と不思想の間の交流を断つてはいけない、という感じですね。それによって人間ははじめて状況に適応していきける、と思っただけですよ。

一つの独立国みたいなものをね、家としてつくろうとか、兄弟としてつくろうとか、同じ学校の仲間同士で作ろうという時にね、普通は思想を過信してね、思想にくくっちゃるところに今迄の共同体の崩壊の原因があつたでしょうね。

井上 それは何でくくればいんでしょうかね。

鶴見 一番確実に育つ条件というのは迫害によってくくるということですね。迫害された時に叩きかえさなければならぬでしょう。その場合に強いんですね。だから奈良の心境部落ももとは天理教のある一派が内部で村八分されたんですね。それに対して自立しなければならぬので、ああいう風になっていったんでしょ。だから迫害されている集団は強いんだけど、迫害の条件がなくなっちゃった時に自然消滅するわけですね。

それ以外ですと、風景というのは強いらしいですね、無意識に自分がそこで育つわけだから、土地と自分とのつながりというのが一種動物的な嗅覚のつながりでしょう。死ぬ時はもとのところに帰っ



鶴見 大体ね、変なことをいろいろとやっている、人間を見るカンがあってね、フツと見てこれは透明国家であるかどうか、人間を見た場合にね、何となくカンが出てくるということはあるんですよ。講談の中の話みたいなんです。すべての透明国家でありうるようなケをもっている人は、お互連絡し、またお互に対して透明、

井上 すると我々が手をつけられるとすれば、まず透明国家をつくることですね。

鶴見 透明人間の形をとることが必要なんでね、スウィス1ツと普通の人間が通っちゃってね、今別の国家を通っていることを知らないでいる、というそういう国家をつくることはいいんだなあ。ここは別の国家です、あなたパスポート見せなければいけませんとか、銃を構えてつきつけるなんてこと必要ないんですよ。そのような国家をつくることは出来ると思うんですよ。

だから例えはね、我々がやってた脱走兵援助というのは日本の中の国家であってね、安保条約と関係なくて別の活動しているわけでしょう。しばしば我々が作っている中を別の人間がフツと、警察官も通っていくんですよ。知らないわけだ、別の国を通っているということ。そういう活動をしている間はね、たしか六年間だったと思うんですが、日本の中の別の国家だったと思うんですよ。結構内部からは密告されることなく、終りをまっとうしたですね。

井上 すると我々が手をつけられるとすれば、まず透明国家をつくることですね。

て死にたいとかね。漠然としたものがあるらしいんですよ。だから土地と自分とのつながりというのは大きいでしょうね。その場合に、「この土地を捨てる者は裏切り者だ」という風にやらないで、離れたくなったら「どうぞ」と出してやってね、帰ってくる時はまたかかえるというゆとりを持ってね。

それからやっぱり産業なんですよ。一番いいのは農業なんですよ。ある種の作物をその土地で作るとか、それからその土地である種の着物とか手仕事のものをつくるか、そういう風なものになるでしょうね。ウイリアム・モリスみたいになってくれれば、それは手動の印刷みたいなもので、きれいな本をつくる。きれいな本を印刷するためにそこで何か書くというようなことも可能になる、ということなんですよ。

井上 しかしひょっとして小説家の国なんてできたらひどいことになりすね(笑)。迫害された大衆小説家の国とか(笑)。

編集部 すると編集者の国ができたりして(笑)。

井上 その間に戦争が起って原稿の乱とか(笑)。

編集部 井上さんが空想の中で吉里吉里国を独立させる時、さっき風景というのが出てきたんですけど、帰って行く土地みたいなイメージがあるわけですか。

井上 ありますね。まわりが山で、さしわたし四里ぐらいで、北と南とになぜか隣りにいく峡谷があって、日当りがよくて、いい川が一本流れているという、それは育ったところですけれども、最上川が流れていて、まわりが蔵王と飯豊と朝日連峰に囲まれている、というような風景ですね。

鶴見 ラップランド人は氷河時代にあそこに住んで生き残った一

つの集団だという説があるんですよ。あの北ヨーロッパにはラップランド人しか住んでいなくてね、熔岩だけで非常に住みにくいでしょう、その中でトナカイを飼うという風なことをしながら数千年あそこ生きてきて残存したわけですよ。土地と彼らとの間の交流というのが大変なものですよ、代々にわたってね。土地やトナカイと離れたら寂しいし、トナカイと一緒に住み、トナカイを殺して食うわけだけど、お互に深く結びついているわけですよ。共同体なんだ、トナカイと彼らは。で、そういう風に暮らしていればね、一他は何もいらぬわけですよ。それで、どうして文明の方にいくか、と彼らは今でも言う訳ですよ。

そういう状態がある時には、基本は迫害ではなく、そこにズーッと住んでいた彼らの風土と産業、そういうのが原因だったんでしょ。うね。だけど鉄が出てくるというのでついに資本主義の中からはれちゃったんですよ。下を掘られると仕方なくて、鉄鋼業に働く労働者にならざるをえなくて、トナカイを飼うことがつづいたら全部終っちゃうんですよ。そういうところが恐ろしいですね。それ程鉄は必要なのか、数千年も続いてきたものを、そんなことやらなくてもいいじゃないか、と思うんですね。何百年かたては上の方を崩さないで鉄を掘る方法も見つかるだろうに、それがまてないというのが資本主義の構造なんですよ。

透明人間になれるか？

鶴見 ラップランドもメキシコのヤキインディアンも超国家という感じがあるんですよ、ヤキはスペインに抵抗して負けなかったんですからね。大変なものですよ。ラップランドもヨーロッパの

近代国家の成立の上を行っているわけですからね。

これと逆に潜在的半国家、国家の一部に見えて実は機能的に違っているというグループは相当数あるわけでしょう。それをどういう風に我々が形成してやっていくか、ということが当面の課題になってくるんじゃないですか。

ある意味で透明人間の形をとることが必要なんでね、スウィス1ツと普通の人間が通っちゃってね、今別の国家を通っていることを知らないでいる、というそういう国家をつくることはいいんだなあ。ここは別の国家です、あなたパスポート見せなければいけませんとか、銃を構えてつきつけるなんてこと必要ないんですよ。そのような国家をつくることは出来ると思うんですよ。

だから例えはね、我々がやってた脱走兵援助というのは日本の中の国家であってね、安保条約と関係なくて別の活動しているわけでしょう。しばしば我々が作っている中を別の人間がフツと、警察官も通っていくんですよ。知らないわけだ、別の国を通っているということ。そういう活動をしている間はね、たしか六年間だったと思うんですが、日本の中の別の国家だったと思うんですよ。結構内部からは密告されることなく、終りをまっとうしたですね。

井上 すると我々が手をつけられるとすれば、まず透明国家をつくることですね。

ある程度不透明な仕方でも目的に応じて連合を組むことは可能だと思
うんですよ。それが必要だと思っただけです。恐らくソビエト連邦の
中にも、そういう透明国家はいくつもあると思うんですよ。それら
が恐らくパステルナークを支えてきたし、ソルジェニツィンをこれ
まで支えてきたと思うんですよ。突如としてソルジェニツィンがあ
そこに出て来たのではないと思うんだ。一人のソルジェニツィンに
対して透明なソルジェニツィンというのは大変な数にのぼっている
と思います。その動きはソビエトの中にあると思うんですよ。
だけど、それに時として公民権を与える、透明でない形にする実
験をしなければいけないので、犠牲者が出るんだな、これが。だけ
どやっぱりやるべきだと思うんですよ。

どんな国家であろうと張りめぐらされた透明国家を全部破壊しつ
くすことにはないだろうと思います。

編集部 日本の場合にはどういふ形の透明国家が可能ですか。

鶴見 例えれば税金を全然払わないで生きてる人を知っています
よ。それで何十年も生きられるものなんです。税金を払わない人
の集団というのもありうるでしょう。それから、あの戦争中でも、
とにかく徴兵にかららないであっぴりいたりこっぴりいたり逃げ
まわった人っているんですよ。いろんな仕方です。そういう人間に
いるんですよ。

井上 赤塚不二夫さんなんか、ある意味です。名前を山
田一郎なんて変えていって、二代目を作ったりして。各作品ごとに
名前をかえていけばいいわけですね。それで、いくつも賞なんかも
らったりして(笑)。

編集部 直木賞五回目とか(笑)。

井上 そうすれば税金なんか逃げられるかも知れませんが。

ただ向う側が今度それを真似してくるところですね。田中角栄
さんなんかと違ういい人が出てきたと思っけると、総理大臣になっ
たとたんにやっぱり顔面神経痛になったりして(笑)。

鶴見 国家の側の知恵もずつと増すんでしょうけど。しかし国
家は次々と新しい方法をやるというわけにはいかないんですよ。同
じ方法を規則的にやるというのが国家の方法ですからね。やっぱり
透明国家の方はですね、いろいろ趣向を変えなくてはならないん
ですよ。それこそ、井上さんの話ではないが趣向というのが物凄く大
事になるわけですよ。生き死にの境になるんですよ。

勿論、趣向を変えない、という方法もあるんですが、それはバカ
になることですよ。だからある意味では葦原將軍なんて透明人間
なんです。あれは近頃の精神病学者の説によると、彼が佯狂(ようきやう)に
せきちがい)だった可能性は高い、と言っています。明治末に入
ったわけですが、軍国主義時代に自分が將軍であると称して、陸軍
大臣だと言ってみたり天皇だと言ってみたり、勲章を人にわけあた
えたりして、とにかく生ききったわけでしょう。あれは一つのおも
しろい生き方ですよ。本当にバカとして生きる道というのはいく
らもあったと思うんですよ。大川周明なんかも最後はその手を使っ
たんだと思うんですよ。占領軍に対してはね。それも一つの趣向な
らうけど。

井上 にせきちがいになるとしても、女房子供の問題があります
ね。子供や女房に「オレはにせきちがいだぞ」というサインを送り
ながらね、本物のきちがいになっていくというのは、やっぱりこれ
は大変な才能がいりますね。

鶴見 「間島バルチザンの歌」というのを書いた榎村浩という人
は、お母さんがとても偉い人で、すすめて彼を精神病院に入れたら
しいですよ。金日成の間島バルチザンを正面からうたいあげた最初
の長篇詩を昭和はじめに書いた人なんだけど、最後は精神病院に入
って死んでるんですよ。転向してないんですよ。お母さんが彼
を支えてるんですよ。そういう珍らしいつながらというのがありま
すね。

井上 女房、子供をどうやってきちがい食わしていか、とい
うのがむずかしいですね(笑)。

無限光年の彼方に……

井上 やっぱり、透明人間という大きなくり方の中でどんな
り方があるか、ですね。それは研究課題ですね。

僕はやっぱり、道化風というのが一番いいような気がするんです
よね。「いや旦那えらいよ」てなこと言っただけ。「リヤ王」の中
道化というのはかなりきついことをリヤ王に言っているんですよ。
ビビン言ってるんですけど、道化というのは、「アイツはおかし
しいことを言う奴だ」という風にみんなに思われていますからね、
どんなことを言っても御愛嬌で済んじゃう。それで済んじゃう時は
別に何も変える力はないんですけどね。やっぱり僕は笑みみたいなこ
とで、「アイツはおかしいことばっかりいってるから、まともには付
きあっていると、こっぴりバカをみる」みたいなところで、たえず
冗談というスタイルをとりながら、「リヤ王」の中の道化のように、
鋭い批判をして、やがては自分の子供とか、そのまた子供に伝わっ
ていくみたいな方法をとりたいですね。笑いの透明人間というか、

笑う透明人間なんていうと昔の大映映画みたいですけど。そういう
感じはありますね。

鶴見 古代に国家が出来て以来の民衆はだいたいにおいては透明
な存在だったと思うんですよ。権力が物凄く力をもって、メガサイ
エンスなんていって、どんなにかいコンピュータを使ったってね、
民衆全体を計量しつくすなんてことは不可能だと思います。突然
変異、不規則な運動は次々と起るわけだから。その意味では民衆
が存在すれば、必ずそこには透明な次元というのはある筈だし、な
かなか一元的な国家権力というのは存在しえないでしょう。

井上 やっぱりこうしてみると、急に楽天的になっちゃったけど
大衆の勝ちですね(笑)。どんなことをしても、しめつける側は必
ずいつか力学的に負けるという時がある。

鶴見 数千年の時間において考えればそうですね。物凄く巨大な
ナイアガラの滝ぐらいある装置を作って、コンピュータをまわし
たって、それはエネルギーがいるわけだし、エネルギーが涸渇して
くるわけですよ。国家権力といえども浪費できないわけだし、段々
に国家の駆使するメガサイエンスというのは縮小せざるをえないし、
また違う状態を、というのが来るのではないですか。

井上 後に続くを信ず、という感じですね(笑)。

鶴見 それで最後は乏しきを分かかって、お互いに助けあって減
っていくべきではないのじゃないですか。

井上 そうですね。